

第二学年生活綴り方指導案

授業者 森知 美香<高知>

1. 指導題目 『いちばんだいじな人のいちばんだいじなことをつづる』

——文章の構成（組み立て）に視点を当てて

2. 指導にあたって

(1) 二年五組のつづり方の出発

昨年度、いっしょに歩んできた三十名の子どもたちと、今年もまた歩み始めることになった。その出会いの日、私は早速つづり方の課題を出した。

『学校が始まった初めての日をつづりましょう』

過去、多くの子どもたちが、新しい学年になって教師から提示される「作文」の課題は、『〇年生になって』などというものが多かった。そして子どもたちは、「ぼくは〇〇をがんばります」とか「〇〇先生になってうれしかったです」というような、教師に迎合的な紋切型の文章を書くのが例となっていた。

しかし私は、昨年度から念願において指導してきた「事実をありのままに」という生活つづり方の原則的指導をこの出会いの日から生かそうと、この課題を示したのであった。

子どもたちは、昨年度からの学習をふまえてつづってきた。

<前略> あそびにいっちょってかえってきたらおかあさんがかえってきちよった。わたしは、「ただいま。」

というて、じかんわりをしに二かいにあがった。おかあさんが、

「なんくみ、だれ先生。」

ときいた。おかあさんのこえは大きいから、二かいまでようきこえる。

わたしは、

「五くみ、もりち先生。」

と、カーテンをしめながらいうた。ほんで、おかあさんが、

「ものがいいやすいき、かまんわえ。」

というた。<後略> (めぐみ)

学校からかえってきて、かばんをつくえの下におきながら、

「おかあさん、またおんなじ先生になったで。」

というた。<中略> おかあさんが、

「よかったやんか。」

といった。ぼくは、

「よくない。」

というた。おかあさんが、

「なんでよくないが。」

ときいた。ぼくは、

「ほかの先生のかお、見たかった。」

とマットへすわった。<後略> (ゆうた)

題材としては、やや限定された感があったけれど、記述のしかたとしては、ほぼ展開的過去形で表現されていることに、私は少しの安心感を覚えた。

「だれでも、なんでも言える、自由につづれる教室」の出発であった。

(2) 「なにをつづるか」にかかわって

学年当初は、春先のことでもあるから、生き物に寄せる関心がクラス全体をおおっていた。

元気者のたいち君は、「やごがとんぼになるところを見た」と題して、原稿用紙6枚にも及ぶつづり方をしあげたし、じゅんじ君は、同じ題材で彼らしい発見もしてきた。

やごのだっぴ

じゅんじ

月よう日、一じかんめのやすみじかんに、ひみつのぼしよにいった。ぼくがやごをつかまえた。ぼくが、

「だっぴしゆうで。」

といった。たいちくんが、

「さわったら、いかんぞ。」

といった。とんぼは、おなかまで出てきちよった。

二じかんめのやすみじかんに、

「さわってもいい。」

と、ぼくがきいた。たいちくんは、

「いいよ。」

といった。とんぼは、ぜんぶ出てきて、ぼくの手の中に入った。たいちくんが、

「はよう、先生に見せにいこう。」

といった。

ぼくとたいちくんが、じゅんばんじゅんばんにとんぼをもっていった。とんぼは、やわらかくてほかほかやった。

男の子がつかまえてきたかまきりがたまごを産み、それがふ化したときは大騒ぎにもなった。ともみちゃんは、そのときのおどろきと発見と不安を、のがさずつづった。

かまきりの子ども

ともみ

きょう 学校で

かまきりのたまごから

かまきりがいっぱい生まれるのを見た。

びっくりするほど 生まれてきた。

いまも いっぱい 生まれている。

うじょうじょ うごいている。

一ぴきだけおそいのがいる。 中略

元気なかまきりは、虫かごの一ばん上までのぼってきた。

たまごから出てきたのは、かわいい。

おとなになったら、

かまが大きくなるから どうしよう

と、おもった。

私もまた、「生き物を見る目」は子どもたちにとって大切な題材と考え、「かえるおこし」をしくんだりしてきた。

この時期、子どもたちの取材の目を広げるために、題材ノートを持たせた。「一日にひとつ、つづり方のタネを見つけよう」と声をかけて生活のあらゆる場からの取材を求めた。そして、朝、子どもたちが提出してくれる題材ノートに評価を加えることも続けてきた。これは取材指導のためには欠かせないしごとだと考えたからである。そういった過程で、少しずつではあるけれど、子どもたちの取材の範囲も広がりを見せ始め、同時に、ねうちある題材に向かう関心も育ってきたと思う。

かずゆきに本をよんじやった

あゆみ

月よう日、夜ごはんのあとでしゅくだいをしよったら、かずゆきが、

「本よんで。」

といった。わたしは、

「わかった。」

とって、すつとしゅくだいをすました。

わたしは、下から『ピーターパン』の本をとってきた。わたしのベッドにかずゆきがねよつた。かずゆきは、目をあけてじつとしちよつた。わたしは、ベッドに上がった。

「かずゆき、ピーターパンもってきたき、よんじやうき。」

といった。かずゆきは、

「うん。」

とって、本のひょうしを見た。わたしは本をまくらの上において、下むきになった。かずゆきも下むきになった。

わたしは手をのばして、本をいっぱいにひらいて、ゆっくり読んだ。かずゆきは、うなずきながら聞いた。＜中略＞

本がおわってから、

「かずゆき、もっと読む。」

ときいたら、

「よむ。」

といった。わたしは、また本をとり下にいった。

きゅうりょう日

りえ

「ただいま。」

お父さんがドアをガチャッとあけた。お父さんは、ゆっくりかいだんを上がってきた。

お母さんは、大いそぎでお父さんの前に行って、りょう手をそろえて出した。

「はい。」

お父さんがきゅうりょうぶくろをわたしたら、

「ありがとうございます。」

お母さんがれいをした。お母さんは、すぐふうとうをあけて、お金を見た。

「見せて。」

わたしが言ったら、お母さんは、

「だめ。」

とって、ひき出しにきゅうりょうぶくろを入れた。お母さんは、お父さんのおるすいじばに行った。こっそり下において行って見てみると、ビールが一本多かった。

こういったつづり方を一枚文集（少ページ文集）にして発行して、共に読み合っていくうちに、「なんでもいえる、つづれる」ことへの深まりも見え始めた。

かずひさ君は、拾った五十円をだまって使ったことを日記に書いてきた。私はそれをもとに、彼と共に思い出し直しをして、できあがったつづり方を持って彼の家を訪ねた。お母さんは、かずひさ君のお金に対する常日頃の生活のしぶりをずっと心配をされていたものだから、涙を流した。それでも、その涙のなかで、そのことをつづれるという彼やクラスの解放性を喜んだ。

めぐみちゃんのお母さんは、一時期社会問題になった「サリドマイド問題」の渦中に生まれ、幼い頃から、そのことによる差別のなかを生きてきた。めぐみちゃんは、このお母さんのことを誇りを持ってつづった。『つづる』創刊号参照。

私は、これらのつづり方をも文集にして発行してきた。こうした向き合いが、子どもたちに、「なにをこそつづるのか」という題材観を持たせ始めてきたようにも思う。つまり、「自分にとって意味ある題材」を二年生なりに模索し始めたと思うのだ。

（3）「どうつづるか」にかかわって

展開的過去形表現の定着の指導及びこきぎみに思い出すことの指導は、一年生のときから一貫してきた。個人差はあるものの、前提のつづり方のように、ある程度身についているように思われる。

この指導については、特に一枚文集の発行の際の読み聞かせの際、表現に即していねいに説明ないし評価を加えていくよう努めてきた。そしてまた、子どもとの共同の思い出し直しの作業によって個人指導もおこなってきた。

表現についてのとりたてての指導としては、特に、「……。」のあとに「と」のない記述をさせようと試みた。これは、「とあった」「と～した」などというように、やや説明的になりやすい表現を、「と」を省くことによって、説明と描写をはっきりさせようと考えてのことである。

大きくなったら

まみ

「大きくなったら、どうぶつのおいしゃさんになり。」

お母さんがテレビを見ながらいった。

「うん。」

わたしもテレビを見ながらいった。

「ほんなら、かすみは。」

かすみがきいた。

「どうぶつのかんごふさん。」

お母さんはこたえた。

「うん。」

かすみはいった。

少しして、

「すいかやさんになりたい。」

かすみが立っていった。

「なんでになりたいが。」

わたしがきくと、

「だって、すいかいっぱいいたべれるもん。」

かすみはこたえた。＜後略＞

これについては、指導後、文章の流れとして全体的に不自然な感じがいなめなかったけれども、その後子どもたちは、この表現方法も生かして無理なく表現できるようになってきている。

しかしながら、「はじめ」「なか」「おわり」をはっきりさせてつづる、読み手を意識してつづる（だれにもよくわかるように）、ものによりそってつづる…等、子どもたちそれぞれに課題は多い。

（４）本時の学習にあたって

子どもたちとの二年間の歩みのまとめになるであろう今回の学習は、「なにを、どうつづるか」ということを統一的にとらえさせたいと考えて立案し、三学期の当初にスタートさせた。

「なにを（題材）」については、指導題目にあるとおり『一番だいじな人の、一番だいじなこと』と私の方から設定した。日々の生活のなかであたりまえのように流れていく、自分にとってだいじな人との関係を、あった事実にもとづいてじっくり考えさせたいと願ったのである。やや抽象的に過ぎる感があるけれど、基本的には、そのことを子どもたち自身が選び出すことをねらいとした。

学習の初めに、子どもたちが選び出したことは、

- ・しごとのないお母さんが、なんとかして仕事を探そうとしているそのすがた（ともみ、かよ）
- ・大病を患い、手術したあとやおふろに入れたお母さんを見つめたそのときの喜び（りさ）
- ・指がちょっとしかないおじいちゃんへのこころくばり（ひろし）
- ・忙しすぎるお母さんとの、たまの休みのひととき（まさのり）
- ・糖尿病を患うおばあちゃんへの心配（さほ）
- ・高校への進学を心配している姉や父母（りえ）
- ・お父さんが病気のために、給料のないわが家の暮らし（ふみこ）
- ・やっと探した仕事、会社の一方的な都合で、たった一日でくびになったお母さん（あやこ）
- ・別れてくらすお父さんとのクリスマスのひととき（じゅんじ）

等であった。当然、指導者の私にも、「つづってほしいこと」が子どもたちそれぞれにある。だから、私が設定した課題を自分の認識でとらえきれない子どもには、私の持っている「つづってほしいこと」の暗示も与えてきた。そうして、子どもたちがつづったつづり方のひとつひとつをみんなで読み合い続けている。

「どうつづるか」については、子どもたちのつづり方の表現のしかた、題材を吟味した上で、展開的過去形表現を重視しながら、それぞれのつづり方の表現にあわせて話し合う。本時の授業もこの一連の流れのなかに位置づけている。

本授業の教材は、かずひさ君が、「障害」をもって生きる弟のことをつづったものである。かずひさ君は、「だいじな人」として自分の認識でこの弟を選んだ。私はずっと以前から、かずひさ君には弟との生活をつづってもらいたいと考えていたものだから、この学習で彼が選んだことがたいへんうれしかった。彼は、『たあへい』（弟のたかふみのこと）と題して、「たあへいは、お母さんのおなかの中で一回しんだ…」とつづった。

①たかふみは、お母さんのおなかの中で一回しんだ。それで、手と足がふじゆうだから、何回もびょういんににゅういんした。ちょっとは歩けるけど、すつところぶ。でも大きかのびょういんににゅういんしたから、だいぶ歩けるようになった。

テレビのへやにかねのぼうがある。たかふみは、かねのぼうをおさえて歩くれんしゅうをしている。

②たかふみが学校に行ける紙がきた。お母さんが、

「たかふみ、学校行けるかもしれんで。」

といった。そのときたかふみは、自分の足で十ぼぐらい歩いた。ぼおくは、「たかふみは、うれしいき歩いた。」と思った。

③夜、ねているとき、お母さんに、

「たかふみのだいじなこと話して。」

とたのんだ。お母さんは、

「手と足がふじゆうでも、がんばって歩けばいい。」

といった。

④お母さんがはやくかえってきた日に、お母さんが作ったくじびきをたかふみがひいた。

五しゅうのところをあてた。お母さんが、

「たかふみは、くじびきの天才。九十しゅうのところをおしえたのに、また五しゅうになった。」

といった。

たかふみは、りょう手でぼうをおさえてゆっくり歩いた。歩くとき、こけたらはじめからやりなおしだから、お母さんは、

「こけろ、こけろ。」

といった。ぼくは、「お母さんは、たかふみがいっぱい歩けるように、こけろ、こけろといいゆう」と思った。

⑤たかふみは、五しゅうまでだったら、ちゃんと歩いてまわる。十しゅうになったら、こたつのところをわざとにこけてねる。よこむきになって、りょう手をのばしてうそねをする。

⑥月よう日のおやつはチョコレートです。ぼくはチョコレートがきらいだから、いつもはん台の上においておく。たかふみが歩くれんしゅうをするとき、

「チョコレートあげる。」

といったら、たかふみは、自分でそうぐをつけて、いそいで歩く。

三がっきになって、そうぐをつけて歩くれんしゅうをしたのは二回しかない。今はそうぐなしでも、前よりもいっぱい歩けるようになった。

⑦夜ごはんのとき、お母さんが、

「たかふみが、一年になったら、学校につれて行ってよ。はれの日はつれて行って。雨の日はつれていかんでいい。車でおくっていくき。」

といった。ぼくは、

「うん。」

といった。ぼくは、「たかふみの手をちゃんとひいちゃらんといかんなあ」と思った。

弟のたかふみ君は、四月から一年生である。この文章をもとに、思い出し直しを進めたのであるが、弟の小さい頃のことについては、もうずっと以前に聞いたことであり、また、彼がこの文章で関心を寄せている「弟が歩くこと」については、常日頃の生活のなかの「いつものこと」であるという。最近では小学校への入学にかかわって、特に歩くことに家族の関心が向いているらしいけれど、それもほぼ毎日のことであるらしい。それだから、その生活のひとつひとつについてきめこまやかに思い出すことはかえってむずかしそうであった。そこで、歩く練習をする弟の姿と自分や家族のかかわりを中心につづらせると、前提のいくつかの短い文章群ができてきた。

授業では、この文章群を使ってひとまとまりの文章にしていくための構想（文章の組み立て）

の学習を考えている。かずひさ君の弟を見る目の読み取りを大切にしながら、それがよくわかるようにするための文章の組み立てを考える授業にしたいと思っている。二年生としてはかなりむずかしい展開になるが、今後の文章表現のための示唆になればと願っている。

3. 指導目標

- 自分にとってだいじな人との関係を、日々の生活からみつける。
- 展開的過去形表現をふまえて、題材にあった表現のしかたを考える。

4. 指導計画（13時間＋課外）

- (1) 題材を選ぶ『一番だいじな人の、一番だいじなこと』（1時間）
- (2) 選んだ題材でつづる。（1時間及び課外）
- (3) 思い出し直しをする。（個人又は教師との共同）（1時間及び課外）
- (4) つづり方を読んで、仲間の生活のしぶり〈ものの見方、考え方、感じ方〉表現のしかたを話し合う。（10時間・本時は4時間目）

5. 本時の指導

(1) ねらい

かずひさ君や家族の、弟を中心とした生活がよくわかるように、文章の組み立てをすることができる。

(2) 展 開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	準 備 物
1. 学習課題を確認する。		
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> かずひさ君のかぞくや、おとうとのことがよくわかるように文しょうのくみたてを考えましょう。 </div>		
2. それぞれの文章内容を読み取る。 ・弟の説明 ・学校へ行ける紙が来た場面 ・かずひさ君とお母さんが話している場面 ・歩く練習をしている場面	・かずひさ君の心の動き、お母さんの考え、弟のようすに視点を当てて読み取らせる。 ・弟のことがわかることを見つけさせる。 ・文末に注意させる。 ・お母さんやかずひさ君のことばから考えさせる。 ・会話から、ふたりの心を考えさせる。 ・弟のようすをあらわすことばを見つけさせる	・場面別につづり方を書いた模造紙 ・つづり方を印刷したプリント

3. 文章の組み立てを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・班での話し合いを通して発表させる。 ・組み立てを考えた理由も説明させる。 ・教師の考えも説明する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・場面別に切りとったプリント
4. かずひさ君の朗読を聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ・全文または部分（そのときの状態で判断する。） 	
5. 題をを考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・簡単にあつかう。 	

※参考・教師の考えた組み立て ⑦①④⑤⑥②③

